日本佛教学会第93回学術大会（2024年　於広島大学）

近世初期の僧医の思想と医療――多賀法印流を中心として――

進藤浩司（愛知学院大学非常勤講師）

多賀法印流（法印流）は、多賀大社社僧の医学といわれる。

〔宗与（？――1654）と多賀法印流（法印流）の伝〕

「**江州多賀**の大和尚、**宗与伝灯法印**は、衆生済度の志が厚く、医道を修学したが、治療の効果は思うに任せなかった。そこで、目を閉じ、観察し智慧をもって、ついに生死を出離する道理を大悟した。彼は**法華四諦**の法をもって、仙術を得て、**十二因縁の法をもって**、脈の状態を明らかとした。また**五神通をもって薬方を立て**、太過と不及（の二つの身体の状況）を明らかとした・・・正保の頃、武州下谷池に庵居し、家光を治療し手柄があった。そのころ、加賀の太守利光卿が宗与の仕官を望んだが、奥田宗伝なるものが、一流の極意ヲ修学し、**法印流**と号した」（『法印流之書』要約／金沢大学医学部図書館所蔵）**※1※2**。

〔薬師信仰と医療倫理〕

「先、医法ヲ学ント思ハヽ、為諸人之抛身命可医。是、**如来ヘノ奉公**也。大慈大悲ノ医法ナレハ、全ク非為名聞利養、大小家貧人乞食ニ至マテ、平等ニスヘシ。・・・故ハ病治ハ、**薬師**諸病滅除ノ御願力故也。薬ハ如来ノ薬也。何ヲ以、我物トセンヤ」（『医雑集』／杏雨書屋蔵）。

売薬による利益を厳しく禁じる。また、救済は、『法華経』への信仰によって支えられる。

「経曰**※3**、

若人遭苦　厭老病死　為説涅槃　尽諸苦際

故ニ任**仏勅**、以医術、普衆生ノ尽苦患ト也」（『医雑集』）。

薬は如来の所有、如来の救済の誓願を達成する使命感を持つ。

〔病気と治療の基本概念〕

「諸宗の修行や悟りも、生死の根本を知るための段階である。本来の面目を知って、仏道を弁じるのである。諸医の学術は、生気の根本を知り、病患を救済するのである。〔中略〕**邪正一如**に至っては、何を病といい、何を元気というのであろうか。〔中略〕医と鍼と灸との三つの治療（実際の治療体系）に至っては、補瀉と迎随の道理がある」（『法印流』大意／金沢大学医学部図書館所蔵）。

邪正一如、邪気も正気も一つのものであり、実体としての病気の存在を否定する。邪気と正気の一如は、邪気の由来に理由がある。

「一。**七情**トハ、喜・怒・憂・思・悲・驚・恐也。皆是**一心**ヨリ出ル変気也。眼・耳・鼻・舌・身・ 意、是ヲ六根ト云。心ヲ加テ七情トス。仏八万四千ノ煩悩ト説玉フモ病ノ冂也。是ハ心ヨリ貪嗔痴、分テ也。然ハ諸病トモニ気也。気ハ形ナキ物ナレハ、可病様ナシ。然トモ気滞ハ、其滞タル所ノ肉血臓腑病也」（『医雑集』）。

七情（一心の変気）が病気（のうちの内的なものの）原因である。七情により気が滞る。これが邪気（実邪）である。七情のない仏は、実体のない病気の苦しみを受けない。治療自体は医学的手法に基づき、祈祷を用いた形跡は確認できない（五神通＝五行、法華四諦＝呼息における脈拍の四動のこと。医学的概念や薬の材料を仏教語として説明する）。

※1　宗与の同期、露元法印（？――1644）は、多賀大社本願、観音院第三代住職。「多賀法印流」は暫定的呼称。※2　史料の多くが金沢藩に由来する。※3『法華経』序品の偈。

キーワード：法印流（多賀法印流）、法華信仰、薬師信仰